

資料紹介

東流二絃琴に関する資料目録(大正篇)

重松 恵美

一 はじめに

前稿⁽¹⁾では東流二絃琴^{あずまのうつけんきん}に関する明治期の文献について考察した。本稿はその続編となる。明治半ば以降、家元不在となった東流は、しばらく世間の話題から遠ざかる。この状況を大きく変えるのは、関東大震災とラジオ放送の開始である。

東京下町に広まった東流は、震災と戦災によって大きな痛手を受けたと、よく言われる。しかし、関東大震災は、東流にとって損失であると同時に、復活への転機でもあった。生活の再建のために師匠業へ邁進する者もあり、また、震災復興の世情が東流復興の契機になり得たと考えられる。そこへ、ラジオ局の開設、二絃琴のラジオ出演という追い風を得て、昭和初期の東流は一定の隆盛を見ることがなる。そしてそこには、町田佳聲(嘉章)という人物が大きく介在する。

町田は、東流のラジオ出演をプロデュースし、笛・鼓・三味線など

との合奏を企て、自らも笛や三味線をもって演奏に加わり、その過程で譜の近代化や古曲の復元、編曲、作曲などを手がけることになる。現在、東流の譜は「ヒトフタミヨヤイツムネナ」で音階を示し、縦書きの階名に横棒と傍線を付すことで拍子の長短を表しているが、これは町田式の記譜である。この町田式によって、東流二絃琴はそれまで以上に弾きやすい楽器へと変貌したが、実際には口伝えでの教授も戦後長らく続けられたようである。

そして、前稿でも述べたところであるが、流派としての東流二絃琴において男性の活躍はほとんど見られない。東流二絃琴は長年に渡って素人の女性芸能であったため、社会的経済的基盤に乏しく、組織を持続的に発展させることが難しかったと推測される。大正末期から昭和初期の東流は、町田佳聲と三世望月扑清(歌舞伎囃子方)という男性二人の支援を得て大きく発展したという見方もできるだろう。

一方、ラジオ放送開始に伴う数々の報道は、二絃琴復活に挑む「奥さん方」「婦人達」に対するメディア側の関心を示すものである。素

人の女性芸能であるからこそ注目されたのも、また事実なのである。

なお、今回の目録は大正篇であるが、ラジオ放送の初期の状況を把握するため、昭和三年（一九二八年）までの資料を対象とした。また、明治期の文献についても追加判明分を記載した。前稿では初代家元・藤舎蘆船の囃子方としての事績にはあまり言及しなかったが、今回それも追加した。蘆船は、能楽囃子方から歌舞伎囃子方へ移行する過程で吾妻能狂言の囃子方も勤めている⁽³⁾。彼が歌舞伎界、長唄界で一目置かれたのは、その経歴によるものであり、東流二絃琴が一部の人びとに高く評価されたのも彼の音楽遍歴が二絃琴曲の歌詞や曲調に独自の趣を与えたと考えられたからである。よって、囃子方としての蘆船についても、漸次、考察の対象とする。

二 資料目録

資料紹介の順序は、掲載誌紙の発行年月日による。ただし、推定される執筆年月に基づき記載したものがあ

る。各資料について、掲載誌紙発行年月、著者名、資料題名、掲載誌紙名（および巻号）、掲載ページ、概要の七項目を記す。新聞記事など執筆者不明の場合は著者名を記載しない。概要は省略することがある。また、注を付す場合がある。

概要の項目では、人名、曲名に関する情報を出来る限り遺漏のないように取り上げる。

旧字旧かなは適宜新字新かなに代えたが、人名地名の字体はなるべ

く原型を留めた（本稿には、蘆と芦、絃と弦などの表記が混在しているが、原資料の表記を重んじたものである）。誤字脱字や人名注などは「」で注記し、ルビは省略もしくは（）で示す。判読不明の文字は□で示す。なお、今回、ラジオ放送に関する新聞記事を別立て（本稿第三章）とした。ラジオ放送に関しては、町田佳聲「遊びの上に成立した東流二絃琴百年の浮沈」（一九七五年）⁽⁴⁾および『台東区の文化財保護 第四集』（二〇〇四年）などの先行研究に記載のない情報も多く見られることから、当時の東流の状況を解明する重要な手がかりとなるであろう。

*

一八七五年（明治八）十月

西村隼太郎編『諸芸人名録』

《概要》「長唄之部」の「上等之部」に「浅草新スカ丁 ○藤舎芦船」とある（○は鳴物の印）。同じ長唄の「下等之部」には「湯島天神 ○藤舎芦鶴」「塩町一丁目 ○藤舎芦響」の名があり、歌舞伎囃子方としての蘆船の門弟と思われる。上等・下等の別は、納税額の違いである（上等は月額五拾銭、下等は二拾五銭）。

《注》同書の「二絃琴之部」に「浅草須賀丁 東流家元 藤舎芦船」と門第十名の名があることは、前稿で紹介した通り。同書には「吾妻能狂言之部」もあるが、蘆船（芦船、芦船）の名はそこには含まれていない。

一八八〇年(明治十三)七月

横山錦柵『東京商人録』大日本商人録社、二九五頁

《概要》「新富座之部」に「浅草区新須賀町三番地／太鼓 藤舎音船」とある。

《注》本書には二絃琴の項目がなく、蘆船は歌舞伎囃子方としてのみの掲載である。

一八九六年(明治二十九)十月

正岡子規「木犀や母か教ふる二絃琴」『太陽』二卷二〇号、二四六頁

《概要》鳴雪選「発句」の冒頭に子規の句が三句掲載されており、そのうちの一句が二絃琴を詠んだもの。

《注》のち、「新俳句」(民友社、一八九八年)および『頼祭書屋俳句帖抄』上巻(俳書堂、一九〇二年)に掲載。『子規全集』第二巻講談社、一九七五年六月五六五頁には「木犀や母が教ふる二絃琴」として収録。

一九〇九年(明治四十二)二月

徳富蘆花原著、柳川春葉脚色『脚本 不如帰』今古堂書店、八六頁、九八頁

《概要》構成は、序幕・伊香保郊外の採蕨、二幕目・川島邸座敷、三幕目・逗子海岸、四幕・片岡邸後園、五幕目其一・逗子別荘、其二・片岡家玄閤、六幕目其一・山科停車場(夢)、其二・佐世保海軍病院、七幕目・片岡浪子臨終、大詰・青山墓地。二絃琴は三幕目に登場する。

三幕目冒頭の舞台設定と、三幕中盤の二絃琴登場場面を引用する。

「平舞台、上手寄りに屋根傾き格子戸破れ、幾年の風雨に曝れて黒みを帯びたる丹塗の不動堂。其下手に老松一株、幹太くして根上れるが、翳鬱として屋根を覆ふ。下手は風に細りたる磯馴松一株、其渚に一艘の漁舟繫ぎあり。上の方は一面に老松生茂りたり。奥は一面に静けき海原、空には中秋十五夜の月澄めり。岸辺を洗ふ波音にて幕開く。／武男(海軍少尉の服に外套を着たる)と浪子(琉球飛白の着付、同じ羽織に白きシヨールを纏へる)の兩人椽に腰掛け乳母お幾松の根下に蹲り居る。

(略)

お幾は下手に入る。／漣の音に和して、二絃琴と明笛と合奏の音洋々として聞ゆ／浪子は恍惚と立ち上りて、／浪子 貴方、又合奏が始つてよ。／武男 誰かの別荘だと云つたつけね。(略)／浪子(其ま、見上げて)仲の好い御夫婦よ。／武男 此方も負けぬ気になつて大に演ろう、浪さんはヴァイオリンが巧いから、僕は尺八でも習つて来るからね、今度は大にやるさ、何有他に負けるものか。」

《注》舞台のための脚本でなく、複数の舞台を参考に執筆されたという脚本である。満月、波音、合奏は美しく穏やかで幸福な場面を演出するが、不動堂と松の寂しい情景が、いずれ訪れる悲劇を暗示する。なお、この場面については、古井戸秀夫が指摘するように、男女の合奏、明清楽の流行、和洋合奏など、明治の音楽状況を端的に示したものとなっている。古井戸によると、「ヴァイオリンが琴になる演出もある。」という。

一九〇九年(明治四十二)三月

加藤長江(庸三編)『日本音楽沿革史』松本楽器合資会社出版部、一〇三頁

《概要》「楽器根原誌(和漢洋)」の中の「三絃琴」の説明に、「加藤蘆舟と云ふ人、八雲琴より工夫して造る。」とある。

一九一三年(大正二)九月「執筆」

宮本百合子「ひな勇はん」

《概要》祖母と京都に行った私(百合)は、祇園の舞子、雛勇ことお妙ちゃんと親密になる。私は二ヶ月余り京都に滞在して、泣く泣く東京へ帰り、しばらくの文通のち、雛勇の死の知らせを受け取る。二絃琴の登場場面は次の通り。「私達は二人でお互いによっかかりっこをしながらこんなとりとめもない、そして美しくしい気持で葉玉の方や子猫や白粉の瓶や、そんなものを見ながらはなし合つて居た。すじ向いの家で二絃琴を弾いて居る。お妙ちゃんはそのれにかるい調子で合わせて居たがフツとだまって私の横がおをジーツとまばたきもしないで見つめて居る。(略)「どうもせんけど……別れてしまうた時よく思ひ出せる様によく見とくのや……その方がいい思つてナ」

《注》著者生前未発表の短編小説。引用は『宮本百合子全集』補

巻一(新日本出版社、一九八一年)二二二頁。「二絃琴」とあるが、

京都が舞台のため八雲琴と解釈可能であり、東流二絃琴は東京以外の地域にはほとんど伝播していないため八雲琴と解釈する方が自然であるとも言える。ただし、舞子であるお妙ちゃんが「かる

い調子で合わせ」るのであれば、俗曲を弾いていたものと解すべきだろう。八雲琴は元来、神社に奉納演奏するための楽器として作られており、東流二絃琴は俗曲を演奏するために八雲琴の系譜から離脱し独立した流派であり、楽器の形状にも多少の違いがある。とはいえ、明治二十年代(一八九〇年頃)の大阪では、八雲琴(7) 独習用の譜に俗曲を含むものが複数刊行されており、少なくとも大阪近辺においては八雲琴で俗曲を弾く人々が存在したと考えられる。よつて、「ひな勇はん」の二絃琴は八雲琴かもしれないが、東京生まれの作者はこれを東流二絃琴のイメージで書いた可能性もある。いずれにせよ、二絃琴に美しい死のイメージが付加されている点は注目される。そして、二絃琴の二本の絃が、恋人同士のように寄り添う二人の姿と重なり合う。二絃琴は二本の絃を同じ音程に(同律に調弦)して、基本的に二絃を同時に弾く楽器である。そうした楽器の特性から喚起されるイメージというのは、複数の絃がそれぞれ異なる音を出す一般的な弦楽器とは大きく異なるものとなる。

一九一七年(大正六)九月

芥川龍之介「田端日記」『新潮』

《概要》作家の日記を連載する企画で、芥川の日記、数日分が雑誌掲載された。「廿九日」の項に二絃琴に関する記述がある。「すると、向うの家の二階で、何だか楽器を弾き出した。始はマンドリンかと思つたが、中ごろから、赤木があれば琴だと道破した。僕は琴にしたくな

かつたから、いや二絃琴だよと異を樹てた。しばらくは琴だ二絃琴だと云つて、喧嘩してゐたが、その中に楽器の音がびつたりしなくなつた。今になつて考へて見ると、どうもあれはこつちの議論が、向うの人に聞えたのに相違ない。」

《注》「僕は琴にしたくなかつた」とあるが、「どうせ暇つぶしにやる議論だから勝つても負けても、どつちでも差支えない」とも記されており、議論したいがための議論である。「道破」とあることから、赤木の主張した琴が正解である可能性が高い。引用は『芥川龍之介全集』第二卷(岩波書店、一九九五年)二六八―二六九頁。

一九二二年(大正十)「執筆」
長谷川時雨「虫の踊り」
《概要》舞踊の演目のためのメモ書きと思われるもの。序曲で「日ぐらし」が登場し、一段で鈴虫、二段でキチキチバツタとクツワ虫、三段で主役のキリギリスが登場する。四段五段で「虫の踊り上がり」、六、七、八段で虫たちは風に「威圧され倒れ」、九段で「次第次第に死す」という筋書き。各場面の所要時間と使用楽器が記されており、二絃琴は一段にて使用される。「一段 虫一疋(鈴虫)静かに踊る、草に臥す。4分/主 尺八、二絃琴」
《注》ヒグラシに尺八、鈴虫に二絃琴、キチキチバツタとクツワ虫に三味線と鳴物、という楽器の充て方が興味深い作品。引用は、『文学者の日記8 長谷川時雨 深尾須磨子』(博文館新社、一九

九九年)五一頁。

一九二三年(大正十二)二月
町田博三「佳聲」『長唄稽古手引草』邦楽研究会、四三八―四三九頁
《概要》下巻説話篇の「第三課 家系制度と流派」に「其の他家」と題して、初代蘆船の経歴を紹介。『万家肖像雅名集』(一八八四年の蘆船像を転載。本文は以下の通り。「現今では男の後継者は絶へて居るが記憶すべき人は藤舎蘆船(加藤宗三郎、天保元―明治二十二)がある、此の人は元親世流の太鼓打であつたが長唄囃子界に入り福原百之助(後五世望月太左衛門)の門弟となり望月太意次郎と称し、後芦船と号し、本行に精通して居るだけに拵へ物に妙を得て二世杵屋勝三郎が日吉吉左衛門の為に本行がらりの「舟弁慶」や「安達原」を作曲した時の相談相手は此の芦船であつた、晩年には二絃琴の奏法を工夫して自ら家元となつた、然し鳴物師で今尚ほ藤舎を名乗つて居る人も相当にあるやうだ。」

《注》「本行がらり」は「本行がかり」の誤植か。勝三郎作「舟弁慶」「安達原」とは、能楽に長唄を取り入れた吾妻能狂言の作品であり、これらに鳴り物の節をつけたのが蘆船である。
一九二四年(大正十三)四月
芥川龍之介「少年」『中央公論』
《概要》「少年」の第三章「死」において、二絃琴の師匠の死去の話題が端緒となり、父と子が「死」について対話する。「とうとうお目

出度なつたさうだな、ほら、あの榎町の二絃琴の師匠も。……。」という父の言葉を誤解した保吉は「さつきはよそのお師匠さん、今度は僕がお目出度なつた！」と話しかけて、家族に笑われる。「お目出度なると云ふことはね、死んでしまふと云ふことだよ。」という父の説明に、保吉は「死んでしまふつて、どうすること？」と問いかける。

《注》家族の楽し気な食卓が描かれているが、二絃琴と死のイメージの結びつきに注意したい。独奏されることが多く、音量の小さい楽器であることと、奏者の減少が、二絃琴を寂しい印象の楽器としたのであろう。引用は『芥川龍之介全集』第一巻(岩波書店、一九九六年)六三―六四頁。

一九二七年(昭和二)

「日本音楽の趨勢」(東京日日通信社編『現代音楽大観』九〇―九三頁)

《概要》「日本音楽の趨勢」の章に「東流二絃琴」と題して流派の沿革が述べられている。ここから人物情報のみ拾うと以下のようになる。蘆船の従兄弟「巢鴨の本田某と呼ぶ神主」が「東流二絃琴を案出した」。蘆船は「小林好愛氏の地所内に居を構へてゐた」。宝生流鳴物に長じ特に大鼓を得意とし望月太意次郎と名乗る名手」であった。

「故日吉吉左衛門(略)および現長唄界の重鎮稀音家六四郎氏の巖父故三郎兵衛、先代住田又兵衛等の同志と相図り「東能」を創始したが、不幸宗家(先代梅若萬三郎)の忌諱に触れて一時破門せられ、それゆえに「八雲琴の改良に没頭」した。楽器は当初、「本所区二ツ目松井町三丁目の柏屋永次郎が一手に製作したが、現在は芝区南佐久町の箏商

新井長次郎氏が製作しつつある」。蘆船は「鳴物の名手先代住田又兵衛及其妻藤舎蘆琴等と共に各所に出演」した。「九代目團十郎は之を愛好」して「忠臣蔵」の由良之助を務めた際、舞台に之を弾じて好評を博した。「浅草猿若座に於ける、市村家橘(略)の「笹野権三」の際は、蘆船自ら舞台裏に弾じ」た。蘆船の墓は震災後「廃墟同然になつて居たのを、小林好愛氏及び小林氏の愛嬢にして故侍医頭医学博士青山胤通氏未亡人(略)父子相談の上昭和二年中秋立派に修理せられた」。蘆船の没後は「其の高弟蘆瑟の夫君斯波二郎氏、及び小林好愛氏等が、家元の後継者擁立及び斯道の統一を図つたが終に実現するに至らなかつた」。その他、門弟として名の挙がっているのは、蘆洲、蘆月、蘆曲、蘆光、蘆□、蘆琴、蘆柳、蘆橋、蘆水、蘆江、蘆信、蘆蝶、蘆菊、蘆秀、青山未亡人、奥平令夫人、酒井氏夫人、松本君平氏夫人である。ラジオ放送に協力した望月扑清と望月初子の名もある。

《注》住田又兵衛(二代目)は、望月扑清の回顧談(一九二八年)にも

蘆船の共演者として登場する(本稿次頁参照)。妻の蘆琴は前稿にて紹介した『万家肖像雅名集 音曲之部』(一八八四年)に二絃琴名取として掲載されている。九代目團十郎が「忠臣蔵」の舞台で二絃琴を弾いたとあるが、この件について長谷川時雨は次のように記している。「九代目市川團十郎が「忠臣蔵」の大星内蔵之助で山科の別れに「冬の恵」を奏で、また四国旅行の旅土産に「三津の眺め」の唱歌をつくつたので一層評判になつた」。

一九二七年(昭和二)

「現代音楽家総覧」(東京日日通信社編『現代音楽大観』二八七―二八八頁

《概要》「現代音楽家総覧」の「和楽の部」に、二絃琴の名取四名が掲載されている。藤舎蘆洲(大澤やす)と藤舎蘆蝶(櫻井蝶)は紹介文のみ、藤舎蘆風(守谷ふさ子)と藤舎蘆水(森こう)は写真付き。四名の紹介文は『台東区の文化財保護 第四集』(注5)に全文収録のため、ここには記載しない。蘆洲は初代蘆船の門下であり、蘆蝶は蘆垠の門下、蘆風は蘆景の門下、蘆水は蘆柳の門下であると記されている。蘆洲の住所は小石川区中町(略)、蘆蝶は日暮里渡辺町(略)、蘆風は四ツ谷区忍町(略)、蘆水は日本橋区本小田原町(略)とあり、蘆水のみ電話番号を載せている。また、蘆水については「昭和二年一月には歌舞伎座に於て片岡仁左衛門の「阿蘭陀船」に二絃琴を弾じ多大の好評を博した。」という逸話も記載されている。

一九二八年(昭和三)九月

伊庭孝『日本音楽概論』厚生閣書店、四一六頁

《概要》「楽器及び楽器法」の章に「東流二絃琴」の項がある。「明治四五年頃藤舎芦船といふ人が流行を目あてて是を創製した。芦船といふのは本名を加藤宗三郎といひ、天保元年の生れで、初め観世流の太鼓方であつたが長唄の囃子となり五世望月太左衛門の門弟となつて望月太意次郎と名乗つてゐたが、本行に明るい為めに、拵へ物に長けてゐた。後に藤舎芦船と名乗つてゐたが、遂に二絃琴を創始して自ら家元となつた。今日二絃琴と一般に称せられるのは此の東流二絃琴の事

で、最後まで生命を持ちつづけたわけである。一絃琴は儒家が愛玩し、八雲琴は神道家、而して東流二絃琴は長唄師の發明であるから謡物は歌浄瑠璃で、且つ囃子を入れて賑かな合奏をするので、一時流行したものであつた。芦船の没したのは、明治二十三年である。／東流二絃琴はさういふわけで、合奏の都合上、律は一定してゐない。感壺は／アメツチニネハスミワタリヒキナレシヲコトヤイクヨサカエノホラン／といふ三十一文字であるが、歌の伴奏として三味線の如き機能を有するので、その感壺は形式だけにしか用ゐられない。絃は紫色を用ゐるのが本式であるといふ。」

《注》蘆船の没年を明治二十三年としているが、これは二十二年の間違い。囃子方としての経歴説明は町田博三(一九三三年)とほぼ同じ。

一九二八年(昭和三)十二月二日

三世望月扑清「桶町の火事」『都新聞』

《概要》歌舞伎囃子方の望月扑清による回顧談。初出時題目は「【七】相中以下に名流の囃子」。この項の挿話は明治十年の出来事で、当時の共演者の一人として藤舎蘆船の名が見える。「なにしろ此時は安政以来の大火ださうで、此の火事の為に折角建てた師匠の家は勿論の事師匠が持場とする肝腎の新富座や澤村座が焼けて了ひましたので、極く人善で、物に無頓着な師匠もさすがに此時ばかりは途方に暮れた様子でした。併し人に厄介になる事を余り好まない人なので、間も無く神田大門通りの裏へ家を探して引越しました。／とやかくする中に本

所の壽座から口がかゝり、翌十年の正月に同座へ入る事になりました。其の時のお囃子の顔触は大したものでした。唄が芳村伊三郎(六代目)富士田新藏(先代)三味線は杵屋六左衛門(先々代)杵屋小四郎(後ち悦翁)鳴物では笛が住田又兵衛(駿河町)小鼓は藤舎蘆船、大鼓が長九郎、私は此の時長左久の名で囃子には太鼓を打つことになって居ました。かういふ具合で私を除く外は、いづれも長唄界の大立者ばかりなのに引かへて、当時壽座の俳優はみんな相中あひぢゆう以下の俳優ばかりだったので。ですから普通なら中々こんなお囃子を揃へる訳にはいかないのですが、恰度焼け出されて困つて居る所へ、座元が本道の道楽から興行を続けて居る人で平素師匠(長九郎)を初め大頭連おほあたまを最員にしてゐた関係からかういふ事になつたのです。

《注》この回顧談は「鳴物閑談」宗家望月扑清の話」と題して、十一月二十六日から十二月三十一日まで『都新聞』に連載され、

後に、望月太左衛門「三世望月扑清」『鳴物閑談』(日刊通信社、一九三八年八月)に収録された。引用には読みやすさを考慮し『鳴物閑談』を用いた。扑清は、二絃琴のラジオ放送に鳴物を加える際(一九二六年十一月五日放送)、町田佳聲から依頼されて作調し、女性の門人を派遣。のち、蘆瑟の家元襲名の際には後援者の一人となつたという人物。⁽⁹⁾

一九二八年(昭和三)十二月三日～五日
三世望月扑清「信州上田の長唄まつり」『都新聞』

《概要》望月扑清の回顧談。蘆船らと上田へ同道した時の逸話。この

項の初出時題目は「【八】信州上田の長唄まつり」「【九】松井田でコレラの足止め」「【十】懐かしい丁髷との別れ」である。以下、長くなるが引用する。

「明治十二年の六月の事でした。其頃信州上田は長唄が大流行で夏になると長唄祭りといふのをやります。この長唄祭りに招かれたのが唄で松島庄五郎、岡安喜代蔵、同喜代太、三味線が岡安喜三郎(四代目)松永鐵五郎、笛が住田又兵衛、小鼓が藤舎蘆船、大鼓が師匠(長九郎)といふ顔触れで、私は矢張り長佐久で太鼓の役でした。(略)ものは舌出し、拍子舞、石橋の三つです。(略)」

さていよいよ翌日になると、屋台の中へ納まつて市中を練歩く事になりました。(略)その聴き手と云つたら実に大したもので、市中は割れ返るやうな人気です。

(略)

こんな具合で、二十七、八、九の三日間を無事に勤め、さア帰らうとなつた所が私達を土地へ招んだ旦那衆が附近の温泉へ案内するから是非もう二三日逗留してくれといふ言葉に一同応じたかつたのですが(略)折角の勤めを断つて了ひました。すると只一人旦那衆の言葉に従つて残らうと云ひ出したのは蘆船さんで之はもつとも私達を連れて来た受合主なんですから、どうしても義理を立てなければならなかつたのでせう。(略)さて翌日になつて直ぐに出発をしようとすると、宿の番頭があわただしくやつて来て、お客様方、誠にお気の毒で御座いませうが、今東京ではコレラが俄にはやり出しましたので、お帰りになる事は出来ません。なんでも警察のお達しによると五日間足を止めるよ

うにとの事です。

(略)

此処に居る中は碁、将棋の勝負が楽みの関の山で、なんにも面白い事がありませんでした。三日目の事、蘆船さんがひよつこりやつて来ました。話によると温泉へ浸つて二日ばかりいい気分です遊んだ上、帰らうとすると東京にコレラがはやつて居るから其儘では帰れないとの事に上田の警察で証明書を貰ひ、之から東京へ帰る所だといふので、一同残念がり、矢張り温泉へ行けばよかつたと、後悔をいたしました。蘆船さんは私達を残して涼しい顔をして、東京へ帰つて了りました。(略)

一九二八年(昭和三)十二月十四日～十五日

三世望月扑清「名人穴で殊勲の茨木」『都新聞』

《概要》望月扑清の回顧談。初出時題目は「十九」名人の穴で殊勲の茨木「二十」中村座西鳥越へ移転す。

「それは恰度十六年の四月、新富座の中幕に茨木が書卸された時の事で、之れは云ふ迄のこともなく五代目(菊五郎さん)のもの、それに先代の左團次さんが綱でした。(略)この茨木の地方は庄五郎さん、正次郎さん、和楓さん、六四郎(佐久間町)さんが立別れで、笛が又兵衛さん、小鼓が山左衛門さん、大鼓が師匠、太鼓が蘆船さんでした。」

《注》春木座の一番を終え、新富座の様子を見に来た扑清が、「山左衛門が来ない為茨木の幕が開かない」と聞かされ、急遽、四日間の代役を勤めた話。扑清は蘆船とも四日間共演したことになる。

る。

三 資料目録(新聞ラジオ欄)

ここでは、新聞のラジオ番組表、および、ラジオ番組の紹介記事を対象とする。ラジオ番組表に記載された情報については、表の形で整理し、掲載年月日と曜日、掲載紙名と掲載ページ、放送時間と放送順、曲目と歌詞掲載の有無、出演者について記載した。特に記述のないものは、東京局(JOK)による放送である。ラジオ欄は各紙に設けられているが、現在確認できた限りにおいて情報量が多いものを主として掲載した。

本稿収録分に関しては、すべて放送当日の朝刊であり、新聞掲載日は放送日と同日である。放送時間については、当時は大まかな時間枠で運用されていたため、東流二絃琴の出演時刻を正確に知ることはできない。平日の夜は八時頃から九時半頃までを演芸の時間とし、毎夜三組ほどの音楽や話芸を放送していたようである。曲目および出演者については、情報量が多く煩雑なものとなっているが、東流の変遷を示す貴重な資料であり、戦災を経て関係者にも忘れられた情報がここに数多く埋もれていると考えられる。

なお、東流について、演奏者についての長文の記事は、表とは別に、掲載年月日と曜日、掲載紙名、掲載ページ、記事の見出し、記事の概要を記載した。

*

一九二五年(大正十四)十二月十一日(金)『読売新聞』朝刊、一〇頁

「きよの放送歌詞／東流二絃琴／四季今様／放送時間午後七時四十分頃」
「二絃琴え出るのは／立派な奥さん方／八雲琴からの分れ」
「小松宮御作／橋場の春／蘆船が節付」

《概要》ラジオ放送の番組案内記事。「四季今様」の歌詞掲載。二絃琴を弾く蘆水と蘆江の写真掲載。写真の説明に、「東流二絃琴／唄の蘆水さん」「東流二絃琴／絃の蘆江さん」と記されている。

以下、蘆水宅における、インタビュー記事。「今夜は東流二絃琴の「四季の今様」が放送されます。歌は藤舎蘆水さん二絃琴は藤舎蘆江さんです。日本橋区元小田原町に蘆水さんをお尋ねすると／折好く蘆江さんも見えて色々放送の打合せをしていらつしやいました。蘆水さんも蘆江さんも歴つきとした奥さんです。交る交るお話をして下さいました／「二絃琴はもうずつと永い事打ち絶えて居りましたのですが今度折があつて放送させて頂くことになりましたので本当に喜んで居ります／初め藤舎蘆船と仰しやる方が／八雲琴から分れて東流といふのをお始めになつたので、明治十七八年頃ださうです。此方が東流の元祖なのです。其の後ずつと打ち絶えてしまつてお稽古をつけていらつしやる方もございませぬし以前お習ひになつた方がいらつしやるにしても何れも六七十台の方でせうから従つて二絃琴も余り振はなかつたのでございませぬ。そんな訳で／家元も只今の所ではございませぬ、藤舎蘆瑟さんと仰しやる方がやつていらつしやる位でせうか。元祖蘆

船と仰しやる方は鳴り物師で、九代目團十郎さんが「船弁慶」を出した時も此の人の鳴り物でないとは道から出られないと仰しやつたといふやうな話しも残つて居ります。そんな訳で東流には皆な／鳴り物が入つてゐるのですが今は譜本も散つてしまつてゐるようですので、今度のラジオ放送にも鳴り物は入りませぬ」

「東流二絃琴のお話はだんだん面白くなつて来ました。此の流派の名譽の歴史は創始当時ずつと上つ方が喜んでお聞きになつた事で記者が見せて戴いた／歌本にも三條実美公の題辞のあると云つた風でした、そして其の十三番に載つてゐる「橋場の春」といふのこそ当時橋場の御別邸にいらせられた小松宮の御作で、蘆船師が即座に御前で節付けして演奏して大へん／御感にあづかつたといふ曲です。歌詞は古今集あたりから抜いたものが多く、従つて節附けも品のいゝのが特色です。蘆水さんと蘆江さんは特に記者のため雑マツの「岸の藤波」を演奏して下さいましたが、上品なうちに変化のある実に面白いものでした。今夜放送される「四季の今様」は別項の／歌詞を見ても分るやうに四季折々の眺めを一歌曲のうちに収めた曲で、中にも東流一流の面白さがありますから屹度ファンを喜ばせる事でせう」

《注》ラジオ初登場の東流を權威づけ印象づけるため、九代目團十郎など著名人の名を出し、様々な逸話が持ち出される。掲載写真眞は琴を弾く姿であるため、二絃琴の形態、大きさなども分かるものとなっている。本来、二絃琴は弾きながら歌うものであるため、掲載写真は其の姿を反映しているが、美声を聴かせるため歌と琴を分担することも多く、ラジオ出演時は分担形式をとつたよ

うである。記事中「ママ」を付けた「雑の」は「雑と」の誤記であらう。なお、同日『東京朝日新聞』(一一頁)は「吾妻流二げん琴」と表記し、次回以降「東流二げん琴」と記載。

一九二六年(大正十五/昭和元)二月十二日(金)『読売新聞』朝刊、一〇頁

「東流二絃琴／梅がしるべ／午後八時廿分」 「蘆瑟さんを／頭目に押し／二絃琴の復活を図る婦人達」

《概要》二度目のラジオ放送。「梅がしるべ」の歌詞掲載。演奏は蘆水、蘆瑟、蘆江。蘆水、蘆江の写真掲載(前回の写真を加工したもの)。

写真の説明は「ふじのや／蘆江さん」「ふじのや／蘆水さん」となっている。

以下、蘆水インタビュー。「きよう東流二絃琴を演ずる藤舎蘆水さんを日本橋のお宅に訪れると下町の露地には冬の薄日が洩れて／格子造りの静かなお住ひ」「二度目の放送ですしさう申し上げる程の事□ありません。この東流の二絃琴は明治になつてから出来たもので、師匠藤舎蘆船が亡くなられてから全く衰へてゐたのを今度出る蘆瑟さん方を年長者に押ししてこれが復活の第一歩に□り□りましたが、長唄とか常磐津とかお琴とかのやうに／派手なものではありません、師匠は九代目團十郎や先代菊五郎を弟子に持つてかなり上流名門の敷居もまたいでゐたやうです／何ぶん力のない者の集まりですからどうかお力添へを願ひます」お話の終る頃格子の音がする、其処へ見えたのは／七十の坂を越した蘆瑟さんと蘆江さん、この婦人方の一つの芸道に対する精

進こそ大したものと云はねばならぬ」

《注》前回の記事で名の挙がつた蘆瑟が、ここで初出演となる。

初演時には「藤舎」に「とうしや」のルビが付けられていたが、今回の記事では「藤舎」の「藤」に「ふぢ」のルビが付けられており、「舎」はルビなしである。次の五月の記事は「とうしや」のルビ、九月は「ふぢ」のルビとなつてゐる。実際のところは「とうしや」と読んでも「ふじのや」と読んでも間違ひではないわけだが、記事中の表記に混乱が見られるのは事実である。二人の記者が交互に取材したとも考えられる。

同年五月十九日(水)『読売新聞』朝刊、九頁

「東流二絃琴／関寺小町(午後八時放送)」 「蘆水さんは／魚河岸の／問屋の女将」

《概要》「関寺小町」の歌詞掲載。前回と同じ写真を掲載。演奏は蘆水、蘆江。

蘆水インタビュー掲載。「二絃琴と云へばまるで廃れた音曲のやうに世間から思はれてゐるがこれでも日本音曲史のページに確然たる／地歩を占めるものである／一時は時流に押されて全く廃れかけたものの最近漸く復活の曙光を見るに至つたのは全く藤舎蘆水さん達の功績に拠るものだ。蘆水さんは日本橋の魚問屋の女将さん、師匠といふより寧ろ日本音曲のために尽さうといふその健気な心持が全く敬服に値する／「何分忙しいのと、廃れたものの復活には幾ら力を尽しても足りません、けれど其の流が全然無くなつてしまふよりは無力の私達でも

努力次第で復活の曙光が見られるとしたら幸ひなものと存じます」／
と日本橋小田原町のお宅で語られた。」

同年九月二十三日(木)『読売新聞』朝刊、一〇頁

「お琴と長唄の間を行く／東流二絃琴／今や囃し方さえ無しと／藤舎
蘆水さん語る」。「東流二絃琴／浅草八景(午後八時放送)」

《概要》「浅草八景」の歌詞掲載。演奏は蘆水、蘆江。蘆水と蘆江の
写真掲載(礼装と見られる新たな写真)。

蘆水インタビュー。「今夕放送される東流二絃琴は藤舎蘆水さんと
蘆江さん、出し物は「浅草八景」お二人とも／放送には取り分けお馴
染みの浅い方々、追々とクラシックに向ふ今日の音曲がこの東流二絃
琴に注意を払ふやうになつて来たのは喜ぶべき現象である、跡方もな
いまでに衰へ切つたこの二絃琴を今日まで終始一貫もちこたへてきた
お二人の努力と忍従とは当然報ひられてい、訳だ、きのう蘆水さんを
日本橋のお宅に訪へば「皆様のお力で永いこと忘れられてゐたこの二
絃琴の／命脈の現れたのは本當に有りがたい事で御座います、今度放
送する「浅草八景」は二絃の端物と云つたやうなもので、段物では御
座いません、二絃はむかし長唄と同じやうに囃子が入つたものですが、
今はその囃子をなさる方がなくなつて終つたのです、それで囃子は入
りませんが若しそれが入るとすれば大へんに賑やかな艶のあるものにな
るので御座いませう／何分琴と長唄の間を行くやうな／地味一方のも
のだけにもともとそんなに人受のするものでは御座いませぬ、本當の
趣味は却つてこのやうなものにあらうかと考へますけどやはり時代と

云ふものはさうばかり行かぬやうで御座います」としきりに時代の推
移を□つてゐた」

《注》ここでの蘆水の発言は、二絃琴についての二つの評価軸を
示したものとなつている。囃子を入れた「賑やかな艶のある」合
奏形態をよしとするか、二絃琴と唄のみの「地味一方」な演奏を
「本當の趣味」と考えるのか。ラジオ放送に関しては「賑やか
な」方向へ進むことになるわけだが、二絃琴は障子越しに聴くく
らいが良いという、落ち着きや静けさを二絃琴に求める鑑賞態度
は根強く存在した。本稿で引用した『脚本 不如帰』や宮本百合
子、芥川龍之介の作品、前稿で言及した夏目漱石『吾輩は猫であ
る』などは、隣家・隣室から聞こえる二絃琴の音色に作中人物の
死を仄めかす役割までも担わせていた。しかし、そもそも二絃琴
曲に「賑やかな」囃子をつけたのは初代蘆船が初めてであり、東流
二絃琴は創成期から両義性をはらんだ流派だったのである。なお、
同日『東京朝日新聞』の「顔ぶれ」と題する記事に「藤舎芦水氏
は二げん琴の歌ひ手としてほとんど唯一の人」とあり、ここでも
蘆水が注目されている。

同年十一月五日(金)『読売新聞』朝刊、五頁

「東流二絃琴／岩戸の舞／午後八時三十分」。「望月一派の／囃入りは
／今晚が初めての二絃琴」

《概要》「岩戸の舞」歌詞掲載。蘆水、蘆江の写真掲載(前回の写真を
加工したもの)。演奏は、「二絃琴 藤舎蘆水／藤舎蘆江／藤舎蘆水」

「笛 望月長子／小鼓 望月初子／小鼓 望月清子／大鼓 望月太賀」。

番組紹介文は次の通り。「今日は藤舎さん一派の二絃琴芦水／芦江、芦友さんのお三人ではやし入りといふ二絃琴放送始めての／囃入り、お上品な所に賑やか味がある。芦水さんは現在二絃琴界に唯一人残された家元、七十の坂も越した御隠居としてもそのすたれ行く楽界の為にその腕をマイクrohンの前に座らうといふ事は□むべきことであらう、それに芦江、芦水さんの努力は亦／師匠を思ふ心と二絃琴界の為になくてならぬ人、持つて生れた江戸ッ兎、日本橋は河岸の血が混つてゐるからだ／お囃しの連中は同じ日本橋望月朴清さん門下として、腕前は素晴らしいもの若手ではあるが未来がある。今度始めて／二絃界のためにわざわざ囃の小手調べをして、手をつけたのも始めてであらう。放送時間は僅十五分位であらうが下品なものでないだけ聞き覚えがするであらう」

【表】新聞ラジオ欄に基づく東流二絃琴出演記録

年	月日	掲載紙、頁	放送時間、放送順	曲目(歌詞掲載の有無)	出演者(藤舎姓は省略)	備考
1926 (大正15/ 昭和元)	2/12 (金)	読売新聞 朝刊 一〇頁	午後八時二十分頃	「梅がしるべ」歌詞有	芦水、蘆瑟、蘆江	唄は蘆水、二絃琴は蘆瑟、蘆江であろう。
1925 (大正14)	12/11 (金)	読売新聞 朝刊 一〇頁	午後七時四十分頃	「四季の今様」歌詞有 「橋場の春」歌詞無	唄 蘆水 二絃琴 蘆江	

《注》町田佳聲(一九七五年)は、「昭和二年一月八日に「ゆるしの色」を放送した時(略)望月朴清氏に依頼して鳴物を入れ」と記しているが、それに先立つ鳴物入りである。なお、番組表には「蘆瑟」の名があるが、本文中には「蘆瑟」は無く「芦友」の名があり、「芦水」を家元とするなど、記述に混乱が見られる。蘆瑟の三代家元襲名は昭和五年四月、四代家元は蘆江であるが、この頃、蘆水を家元に推す動きがあったものか。あるいは蘆瑟を家元と書こうとして間違えたのであろうか。蘆友については未詳であり、単なる記載ミスか、あるいは、蘆瑟の体調不良などで他の門弟の出演が急遽検討された可能性もある。

同日の『東京朝日新聞』は蘆瑟、蘆江、蘆水の三名を記載。また、「岩戸の舞」の歌詞に添えて以下の通り解説を記載、「二げん琴「岩戸の舞」天の岩戸の舞に神神が打ちそろつてはやし大神を迎へ常暗の世は再び輝き渡るのを歌つたためだいたいもの」。

				1927 (昭和2)			
5/29 (日)	4/18 (月)	3/20 (日)	2/16 (水)	1/8 (土)	11/5 (金)	9/23 (木)	5/19 (水)
東京朝日 朝刊 一二頁	東京朝日 朝刊 九頁	東京朝日 朝刊 一二頁	東京朝日 朝刊 五頁	東京朝日 朝刊 八頁	読売新聞 朝刊 五頁	読売新聞 朝刊 一〇頁	読売新聞 朝刊 九頁
午後一時〜放送舞台劇、高峰 びわ、落語、かけ合はなし、 東流二げん琴、独唱とピアノ、 六時〜趣味講座。	午後七時二十五分〜ラヂオ講 座、地方里謡、東流二げん琴、 説教節。	午後一時〜放送舞台劇、落語、 新内、東流二げん琴、マンド リン演奏、六時〜趣味講座。	午後七時二十五分〜講演、薩 摩びわ、東流二げん琴、管け ん楽。	午後七時二十五分〜講演、東 流二げん琴、清元、説教節の 順に放送。	午後八時三十分頃〜	午後八時頃〜	午後八時頃〜
「別れの静」 歌詞無 「浮寝の夢」 歌詞有	「浅妻」 歌詞有 「四季の艶」 歌詞無	「隅田川」 歌詞無 「岸の藤波」 歌詞有	「鶴の舞」 歌詞有 「梅がしるべ」 歌詞有	「ゆるしの色」 歌詞有	「岩戸の舞」 歌詞有	「浅草八景」 歌詞有	「関寺小町」 歌詞有
唄 蘆水 二絃琴 蘆江 蘆壽恵	唄 蘆水 二絃琴 蘆江、蘆侖 笛 望月長子、小鼓 堅田喜千次、 大鼓 望月太賀、太鼓 望月せい子	唄 蘆水 二絃琴 蘆江 笛 望月長子、小鼓 堅田喜千治、 大鼓 望月太賀、太鼓 望月せい子	唄 蘆水 二絃琴 蘆瑟、蘆江 笛 望月長子、小鼓 同太伊、 大鼓 同太賀、同せい子	唄 藤舎蘆水 二絃琴 藤舎蘆瑟、蘆江 笛 望月長子、小鼓 同初子、 大鼓 同太伊、太鼓 同せい子	二絃琴 蘆瑟、蘆江 蘆水 大鼓 同太賀	蘆水、蘆江	蘆水、蘆江
	喜千次は喜千治の誤りか。		蘆瑟の最後の出演と思われ る。		唄は蘆水であろう。 唄は蘆水で、二絃琴は蘆江で あろう。	唄は蘆水、二絃琴は蘆江で あろう。	唄は蘆水、二絃琴は蘆江で あろう。

東流二絃琴に関する資料目録(大正篇)

		1928 (昭和3)											
3/16 (金)		2/14 (火)		12/20 (火)		10/21 (金)		9/21 (水)		8/21 (日)		7/23 (土)	
東京朝日 朝刊 一〇頁		東京朝日 朝刊 九頁		東京朝日 朝刊 一二面		東京朝日 朝刊 八頁		東京朝日 朝刊 八頁		東京朝日 朝刊 九頁		東京朝日 朝刊 八頁	
午後七時二十五分、趣味講座、東流二げん琴、常磐津、地方里謡。		午後七時二十五分、講演、謡曲、東流二げん琴、和洋合奏。		午後七時二十五分、運動講座、地方里謡、東流二げん琴、和洋合奏。		午後七時二十五分、通俗科学講座、地方里謡、東流二げん琴、義太夫。		午後七時五十分、講演、東流二げん琴、放送歌劇。		午後零時十分、西洋音楽講座、落語、東流二げん琴、義太夫、かけ合話、六時、運動講座。		午後七時二十五分、夏の趣味講座、ピアノ三重奏、清元、東流二げん琴。	
「籬」歌詞無 「藤」歌詞無		「軒端の梅」歌詞無 「松の寿」歌詞無		「初子」歌詞無 「三津のあや」歌詞無		「朝嘉倉」歌詞無 「常盤」歌詞無		「菊の寿」歌詞無 「四季の今様」歌詞無		「逢身八景」歌詞無 「きぬた」歌詞有		「四季の詠」歌詞無 「浅草八景」歌詞有	
唄 蘆水 二絃琴 蘆江、蘆侖 笛 望月長子、小鼓 同初子、 大鼓 同太伊、太鼓 同せい子		唄 蘆水 二絃琴 蘆侖、蘆江、蘆天津 笛 望月長子、小鼓 同初子、 大鼓 同太伊、同せい子		「初子」唄 蘆天津 二絃琴 蘆水、蘆侖 「三津のあや」唄 蘆水 二絃琴 蘆侖、蘆天津 笛 望月長子、小鼓 同初子、 大鼓 同たい子、太鼓 同せい子		唄 蘆水 二絃琴 蘆江、蘆侖		唄 蘆水 二絃琴 蘆江、蘆侖 笛 望月長子、小鼓 同太伊、 大鼓 同太賀、太鼓 同せい子		唄 蘆水 二絃琴 蘆江、蘆侖		唄 蘆水 二絃琴 蘆江、蘆侖 笛 望月長子、小鼓 堅田喜千治、 大鼓 望月太賀、太鼓 望月せい子	

	11/20 (火)	9/24 (月)	8/12 (日)	7/10 (火)	4/20 (金)	
	東京朝日 朝刊 九頁	東京朝日 朝刊 四頁	東京朝日 朝刊 五頁	東京朝日 朝刊 六頁	東京朝日 朝刊 九頁	
	午後零時五分～ 東流二げん琴、零時四十分～ ニュース。	午後七時二十五分～講演、浪 花節、清元、東流二げん琴、 午後九時四十分～時報ほか。	午後七時二十五分～東流二げ ん琴、常磐津、放送時代劇、 九時四十分～時報ほか。	午後七時二十五分～趣味講座、 東流二げん琴、義太夫、管げ ん楽、九時三十分～生蘭相場、 時報、天気予報。	午後七時二十五分～講演、東 流二げん琴、音曲、和洋合奏。	
	御大典記念新曲「千代の寿」 歌詞無	「山桜」「うき船」「夕立」 「雀の宿」いずれも歌詞無	「仁王門」歌詞無 「きぬた」歌詞無	「蘆刈」歌詞無 「月の調」歌詞無	「花の雨」歌詞無 「菖蒲」歌詞無	
	唄 蘆水 二絃琴 蘆江、蘆佶、蘆天津 笛 望月長子、小鼓 同初子、 大鼓 同太伊、太鼓 同せい子	唄 蘆水 二絃琴 蘆江、蘆佶、蘆天津 笛 望月長子、小鼓 同初子、 大鼓 同太伊、太鼓 同せい子	唄 蘆水 二絃琴 蘆江、蘆佶、蘆天津 笛 望月長子、小鼓 同初子、 大鼓 同太伊、太鼓 同せい子	唄 蘆水 二絃琴 蘆江、蘆佶、蘆天津 笛 堅田喜之助、小鼓 望月初子、 大鼓 同太伊、太鼓 同せい子	唄 蘆水 二絃琴 蘆江外二名 笛 堅田喜之助、小鼓 望月初子、 大鼓 同太伊、太鼓 堅田喜久枝	
	「千代の寿」作詞 蘆天津、 作曲 蘆水。「都新聞」に 歌詞有。				『東京日日』によれば二絃 琴は蘆江、蘆佶、蘆天津	

四 おわりに

以上、一九二八年十一月二十日の全国中継放送までを今回の目録の対象とした。この日は午後六時からの「子供の時間 奉祝音楽会」なども東京から全国中継された。東流二絃琴も、東京局および大阪局、

名古屋局、仙台局、札幌局などから同時刻に中継放送されたことが東京版の新聞によって確認される。さらに、二日前の『大阪朝日新聞附録朝鮮朝日(南鮮版)』に掲載された「放送プログラム」にも、二十日の「中継放送」として「東流二絃琴」新曲「千代の寿」藤舎蘆水ほか(東京)と記されており、京城局、熊本局、広島局などでも東流二絃琴の演奏を放送していたことが確認できる。

この頃、本土から外地への中継放送は時間を限定して毎日、行われていた。東京の一地域に伝承される東流二絃琴も、ついに中継放送の機会を得て、北海道から九州、朝鮮半島にまで聴衆を獲得したのである。しかも、御大典という天皇の即位行事に当たって御代を寿ぐ新曲を披露する。市井の小さな流派も時代に遅れまいとし、大勢に与していくのである。

蘆水と蘆天津はこの頃から新曲披露に前向きに取り組むようになり、まだしばらくは蘆江と共演しているのだが、その後の東流は蘆水派と蘆江派に分裂する。全国中継というある種の栄光が、東流を勢いづけ、流派分裂の誘い水となったのではないだろうか。

一九二六年には望月扑清の肝煎りで囃子入りの二絃琴演奏が実現し、一九二八年には扑清『鳴物閑談』が新聞連載された。初代蘆船を直に知る人物が東流二絃琴の後援者となったことは、演奏の面でも、社会的認知度の面でも、大きな意味を持つ。扑清が二絃琴との共演のために女性の門弟を派遣したことも興味深い。一九二九年から『女人芸術』に連載された長谷川時雨『旧聞日本橋』に二絃琴に関する逸話がかなり詳しく記されたことなども、ラジオ放送の状況や『鳴物閑談』を踏まえて考察せねばならないだろう。

町田佳聲と東流の関わりについては、今後更なる検討課題となる。町田(一九七五年)は、「二絃琴の『浅草八景』とか『梅がしるべ』といった曲に三味線の手を付けて見たところ確かに音色に変化が生じて面白く聞けるので、筆者自身が三味線を受け持ち匿名で放送にも出演したところが頗る好評であった」と書き残しているが、一九三三年の新

聞ラジオ欄を調査すると、蘆絃の名で三味線を弾いており、また、蘆笛の名で笛の奏者としても二絃琴と共演しているようである。また、同じ一九三三年にはラジオ欄に蘆瑟の名が復活しており、これは蘆瑟として知られている斯波まさの没後であるから、蘆瑟の門弟である蘆江が二世蘆瑟をごく短期間、名乗っていたのではないかと考えられる。次第に戦時色の濃くなる世情の中で、東流二絃琴は内部分裂しつつも、活気のある状態がしばらく続く。一九二九年以降の各資料についても、今後、整理と考察を進めるものとしたい。

注

- (1) 重松恵美「東流二絃琴に関する資料目録(明治篇)」(『女性歴史文化研究所紀要』第二六号、京都橘大学女性歴史文化研究所、二〇一八年三月)
- (2) 町田佳聲「遊びの上に成立した東流二絃琴百年の浮沈」(藤本秀丈企画、町田佳聲監修、平野健次解説『東流二絃琴』キングレコード、KH A 35、一九七五年)によると、町田はラジオ放送開始にあたって「番組編成部員として入局し」、番組プログラムを作成していた。東流二絃琴の奏者を町田に紹介したのは作曲家の長妻完至で、「長妻完至氏に頼んでラジオに出るようになったのも蘆水一派の働きかけであった」という。ラジオ放送の回を重ねるにしたがって、蘆水派と蘆江派の対立という東流の内部事情が生じ、町田はこれに苦慮しながらも交互出演させるなどして東流の隆盛期を支えることになるのである。
- (3) 小林貴「ほか」著『能楽大事典』(筑摩書房、二〇二二年)の「吾妻能狂言」の項に、以下の記述がある。「囃子方は当初は金春座付笛方だった大蔵助之丞ら五座体制系の者が勤めていたらしいが、三味線音楽の出囃子となってからは笛・二世住田又兵衛、小鼓・中村寿鶴、大鼓・住田新七、太鼓・藤舎声船(東流二絃琴創始者)ら歌舞伎囃子方が主要メン

バーとなり、藤舎芦船がその主任であった。」

(4) 注(2)の文献に同じ。

(5) 『台東区の文化財保護 第四集』(東京都台東区教育委員会、二〇〇四年)

(6) 古井戸秀夫「東京の舞踊・邦楽—もうひとつの明治—(国立劇場営業部営業課編集企画室編『舞踊・邦楽でよみがえる東京の明治—国立劇場 第四二回特別企画公演 明治一五〇年記念、公演パンフレット)日本芸術文化振興会、二〇一八年)

(7) 今川鹿三『八雲琴独稽古』(二八九四年)などに俗曲の譜が収録されている。八雲琴について、平野健次「二弦琴」(平野健次「ほか」監修『日本音楽大事典』平凡社、一九八九年)を参照した。

(8) 長谷川時雨「神田附木店—日本橋—」、『女人芸術』第三卷九月号、一九三〇年九月)六八頁。のち、『旧聞日本橋』(岡倉書房、一九三五年)に収録。

(9) 望月扑清と東流の関わりについては、注(2)の町田佳聲(一九七五年)を参照した。